

# 老ハイデルベルヒ

太宰治

青空文庫



八年まえの事でありました。当時、私は極めて懶惰らんだな帝国大学生でありました。一夏を、東海道三島の宿で過したことがありません。五十円を故郷の姉から、これが最後だと言って、やっと送って戴いたき、私は学生靴かばんに着更ゆかたの浴衣やらシャツやらを詰め込み、それを持ってふらと、下宿を立ち出で、そのまま汽車に乗りこめばよかったものを、方角を間違え、馴染なじみのおでんやにとびこみました。其処そこには友達ともが三人来合あわせて居ゐました。やあ、やあ、めかして何処どこへ行くのだと、既に酔よっぱらっている友人達は、私をからかいました。私は気弱きじやくく狼狽ろうばいして、いや何処どこということもないんだけど、君たちも、行かないかね、と心にも無い勧誘かんすいがふ

いと口から<sup>すべ</sup>迂り出て、それからは騎虎<sup>きこ</sup>の勢で、僕にね、五十円あるんだ、故郷の姉から貰ったのさ、これから、みんなで旅行に出ようよ、なに、仕度なんか要らない、そのままでもいいじゃないか、行こう、行こう、とやけくそになり、しぶる友人達を引張るようにして連れ出してしまいました。あとは、どうなることか、私自身にさえわかりませんでした。あの頃は私も、随分、呑気<sup>のんき</sup>なところのある子供でした。世の中も亦<sup>また</sup>、私達を呑気に甘えさせてくれていました。私は、三島に行つて小説を書こうと思つて居たのでした。三島には高部佐吉さんという、私より二つ年下の青年が酒屋を開いて居たのです。佐吉さんの兄さんは沼津で大きい造酒屋を営み、佐吉さんは其<sup>そ</sup>の家の末っ子で、私とふとした事から知合

いになり、私も同様に末弟であるし、また同様に早くから父に死なれている身の上なので、佐吉さんとは、何かと話が合うのでした。佐吉さんの兄さんとは私も逢ったことがあり、なかなか太っ腹の佳い方<sup>かた</sup>だし、佐吉さんは家中の愛を独占して居るくせに、それでも何かと不平が多い様で、家を飛出し、東京の私の下宿へ、にこにこ笑ってやって来た事もありました。さまざま駄々をこねて居たようですが、どうにか落ち付き、三島の町はずれに小ぢんまりした家を持ち、兄さんの家の酒樽<sup>さかだる</sup>を店に並べ、酒の小売を始めたのです。二十歳の妹さんと二人で住んで居ました。私は、其の家へ行くつもりであつたのです。佐吉さんから、手紙で様子を聞いているだけで、まだ其の家を見た事も無かつたので、行つ

てみて具合が悪いようだったらすぐ帰ろう、具合がいいようだったら一夏置いて貰つて、小説を一篇書こう、そう思つて居たので、ありましたが、心ならずも三人の友人を招待してしまったので、私は、とにかく三島迄の切符を四枚買い、自信あり気に友人達を汽車に乗せたものの、さてこんな大勢で佐吉さんの小さい酒店に御厄介になつていいものかどうか、汽車の進むにつれて私の不安は増大し、そのうちに日も暮れて、三島駅近くなる頃には、あまりの心細さに全身こまかにふるえ始め、幾度となく涙ぐみました。私は自身のこの不安を、友人に知らせたくなかつたので、懸命に佐吉さんの人柄の良さを語り、三島に着いたらしめたものだ、三島に着いたらしめたものだ、自分でもイヤになる程、その間

の抜けた無意味な言葉を幾度も幾度も繰返して言うのでした。あらかじめ佐吉さんに電報を打って置いたのですが、はたして三島の駅に迎えに来てくれて居るかどうか、若し<sup>も</sup>迎えに来て居てくれなかつたら、私は此<sup>こ</sup>の三人の友人を抱えて、一体どうしたらいいでしょう。私の面目は、まるつぶれになるのではないでしょう。三島駅に降りて改札口を出ると、構内はがらんとして誰も居りませぬ。ああ、やはり駄目だ。私は泣きべそかきました。駅は田畑の真中に在って、三島の町の灯さえ見えず、どちらを見廻しても真暗闇、稲田を撫<sup>な</sup>でる風の音がさやさや聞え、蛙<sup>かえる</sup>の声も胸にしみて、私は全く途方にくれました。佐吉さんでも居なければ、私にはどうにも始末がつかなくなかったです。汽車賃や何かで、姉から

貰った五十円も、そろそろ減つて居りますし、友人達には勿論<sup>もちろん</sup>持合せのある筈<sup>はず</sup>は無し、私がそれを承知で、おでんやからそのまま引張り出して来たのだし、そうして友人達は私を十分に信用している様子なのだから、いきおい私も自信ある態度を装わねばならず、なかなか苦しい立場でした。無理に笑つて私は、大声で言いました。

「佐吉さん、呑気だなあ。時間を間違えたんだよ。歩くよりほかは無い。この駅にはもとからバスも何も無いのだ。」と知ったかぶりして鞆を持直し、さっさと歩き出したら、其のとき、闇のなかから、ぽっかり黄色いヘッドライトが浮び、ゆらゆらこちらへ泳いで来ます。

「あ、バスだ。今は、バスもあるのか。」と私はてれ隠しに呟き、「おい、バスが来たようだ。あれに乗ろう！」と勇んで友人達に号令し、みな道端に寄つて並び立ち、速力の遅いバスを待つて居ました。やがてバスは駅前の広場に止り、ぞろぞろ人が降りて、と見ると佐吉さんが白浴衣着ゆかたてすまして降りました。私は、唸うなるほどほつとしました。

佐吉さんが来たので、助かりました。その夜は佐吉さんの案内で、三島からハイヤーで三十分、古奈温泉に行きました。三人の友人と、佐吉さんと、私と五人、古奈でも一番いい方の宿屋に落ちつき、いろいろ飲んだり、食べたり、友人達も大いに満足の様子で、あくる日東京へ、有難う、有難うと朗らかに言つて帰つて

行きました。宿屋の勘定も佐吉さんの口利きで特別に安くして貰い、私の貧しい懐中からでも十分に支払うことが出来ましたけれど、友人達に帰りの切符を買ってやったら、あと、五十銭も残りませんでした。

「佐吉さん。僕、貧乏になってしまったよ。君の三島の家には僕の寝る部屋があるかい。」

佐吉さんは何も言わず、私の背中をどんと叩きました。そのまま一夏を、私は三島の佐吉さんの家で暮しました。三島は取残された、美しい町であります。町中を水量たつぷりの澄んだ小川が、それこそ蜘蛛くもの巣のように縦横無尽に残る隈くまなく駈けめぐり、清冽の流れの底には水藻みずもが青々と生えて居て、家々の庭先を流れ、

縁の下をくぐり、台所の岸をちやぶちやぶ洗い流れて、三島の人  
は台所に座ったままで清潔なお洗濯が出来るのでした。昔は東海  
道でも有名な宿場であつたようですが、だんだん寂れて、町の古  
い住民だけが依怙地いこじに伝統を誇り、寂れても派手な風習を失わず、  
謂いわば、滅亡の民の、名誉ある懶惰に耽たつている有様でありまし  
た。実に遊び人が多いのです。佐吉さんの家の裏に、時々糶せり市いち  
が立ちますが、私もいちど見に行つて、つい目をそむけてしま  
いました。何でも彼でも売つちやうのです。乗つて来た自転車を、  
其のまま売り払うのは、まだよい方で、おじいさんが懐からハア  
モニカを取り出して、五銭に売つたなどは奇怪でありました。古  
い達磨だるまの軸物、銀鍍金メッキの時計の鎖、襟えり垢あかの着いた女の半纏はんでん、

玩具の汽車、蚊帳<sup>かや</sup>、ペンキ絵、碁石<sup>かんな</sup>、鉋<sup>かん</sup>、子供の産衣<sup>うぶぎ</sup>まで、十七錢だ、二十錢だと言つて笑いもせず売り買ひするのでした。集る者は大抵四十から五十、六十の相当年輩の男ばかりで、いづれは道楽の果、五合の濁酒が欲しくて、取<sup>とりすが</sup>継<sup>が</sup>る女房子供を蹴飛ばし張りどばし、家中の最後の一物まで持ち込んで来たという感じでありました。或いは又、孫のハアモニカを、爺<sup>じい</sup>に借せと騙<sup>だま</sup>して取上げ、こつそり裏口から抜け出し、あたふた此<sup>ここ</sup>所へやつて来たというような感じでありました。珠数<sup>じゆず</sup>を二錢に売り払った老爺<sup>ろうや</sup>もありました。わけてもひどいのは、半分ほどきかけの、女の汚れた<sup>あわせ</sup>衾<sup>あわせ</sup>をそのまま丸めて懐へつつこんで来た頭の禿<sup>は</sup>げた上品な顔の御隠居<sup>ぼと</sup>でした。殆<sup>ほと</sup>んど破れかぶれに其の布を、（もはや着物では

ありません。）拵げて、さあ、なんぼだ、なんぼだと自嘲の笑を  
浮べながら値を張らせて居ました。頽たい廢はいの町なのであります。  
町へ出て飲み屋へ行つても、昔の、宿場のときのままに、軒の低  
い、油障子を張つた汚い家でお酒を頼むと、必ずその老主人が  
自らお爛かんをつけるのです。五十年間お客にお爛かんをつけてやつたと  
自慢して居ました。酒がうまいもまずいも、すべてお爛かんのつけよ  
う一つだと意気込んで居ました。としよりがその始末なので、若  
いは尚なおの事、遊び馴なれて華奢きやしやな身体をして居ます。毎日朝か  
ら、いろいろ大小の与太者が佐吉さんの家に集ります。佐吉さん  
は、そんなに見掛けんかけは頑丈でありませんが、それでも喧嘩けんかが強い  
のでしうか、みんな佐吉さんに心服しているようでした。私が

二階で小説を書いて居ると、下のお店で朝からみんながわあわあ騒いでいて、佐吉さんは一際高い声で、

「なにせ、二階の客人はすごいのだ。東京の銀座を歩いたって、

あれ位の男っぷりは、まず無いね。喧嘩もやけに強くて、牢に入つたこともあるんだよ。唐手からてを知って居るんだ。見ろ、この柱を。

へこんで居るすら。これは、二階の客人がちよいとぶん殴つて見せた跡だよ。」と、とんでも無い嘘を言つて居ます。私は、頗るすこぶ落ちつきません。二階から降りて行つて梯子段はしごだんの上り口から小声で佐吉さん呼び、

「あんな出鱈目でたらめを言つてはいけないよ。僕が顔を出されなくなるじゃないか。」そう口を尖らせて不服を言うとう、佐吉さんにはこ

にこ笑い、

「誰も本気に聞いちや居ません。始めから嘘だと思つて聞いて居るのですよ。話が面白ければ、きやつら喜んで居るんです。」

「そうかね。芸術家ばかり居るんだね。でもこれからは、あんな嘘はつくなよ。僕は落ちつかないんだ。」そう言い捨てて又二階へ上り、其の「ロマネスク」という小説を書き続けて居ると、又も、佐吉さんの一際高い声が聞えて、

「酒が強いと言つたら、何と言つたつて、二階の客人にかなう者はあるまい。每晚二合徳利で三本飲んで、ちよつと頬つぺたが赤くなる位だ。それから、気軽に立つて、おい佐吉さん、銭湯へ行こうよと言ひ出すのだから、相当だろう。風呂へ入つて、悠々と

日本剃刀かみそりで髯ひげを剃そるんだ。傷一つつけたことが無い。俺の髯ひげまで、時々剃られるんだ。それで帰って来たら、又一仕事だ。落ちついたもんだよ。」

これも亦また、嘘であります。毎晩、私が黙って居ても、夕食のお膳に大きい二合徳利がつけてあつて、好意を無にするのもどうかと思ひ、私は大急ぎで飲むのでありますが、何せ醸造元から直接持つて来て居るお酒なので、水など割つてある筈は無し、頗る純粹度が高く、普通のお酒の五合分位に酔うのでした。佐吉さんは自分の家のお酒は飲みません。兄貴こしちやうが造つくえて不当の利益むさぼを貪むさぼつて居るのを、此の眼で見えて知つて居ながら、そんな酒とても飲まれません。げろが出そうだと云つて、お酒を飲むときは、外へ出

てよその酒を飲みます。佐吉さんが何も飲まないのだから、私一人で酔っぱらって居るのも体てい裁さいが悪く、頭がぐらぐらして居ながらも、二合飲みほしてすぐに御飯にとりかかり、御飯がすんでほつとする間もなく、佐吉さんが風呂へ行こうと私を誘うのです。断るのも我わが儘ままのような気がして、私も、行こうと応じて、連れ立って銭湯へ出かけるのです。私は風呂へ入って呼吸が苦しく死にそうになります。ふらふらして流し場から脱衣場へ逃れ出ようとすると、佐吉さんは私を掴つかまえ、髯ひげがのびて居ます。剃ってあげましょう、と親切に言つて下さるので、私は又も断り切れず、ええ、お願いします、と頼んでしまうのでした。くたくたになり、よろめいて家へ帰り、ちよつと仕事をしようかな、と呟いて二階

へ這い上り、そのまま寝ころんで眠ってしまふのであります。佐吉さんだつて、それを知つて居るに違いないのに、何だつてあんな嘘の自慢をしたのでしよう。三島には、有名な三島大社があります。年に一度のお祭は、次第に近づいて参りました。佐吉さんの店先に集つて来る若者達も、それぞれお祭の役員であつて、様々の計画を、はしやいで相談し合つて居ました。踊り屋台、手古舞、山車<sup>だし</sup>、花火、三島の花火は昔から伝統のあるものらしく、水花火というものもあつて、それは大社の池の真中で仕掛花火を行います、その花火が池面に映り、花火がもくもく池の底から湧<sup>わ</sup>いて出るように見える趣向になつて居るのだそうであります。凡<sup>およ</sup>そ百種くらいの仕掛花火の名称が順序を追うて記されてある大きい番附

が、各家毎に配布されて、日一日とお祭気分が、寂れた町の隅々まで、へんに悲しくときめき浮き立たせて居りました。お祭の当日は朝からよく晴れていて私が顔を洗いに井戸端へ出たら、佐吉さんの妹さんは頭の手拭いを取って、おめでとうございます、と私に挨拶いたしました。ああ、おめでとう、と私も不自然でなくお祝いの言葉を返す事が出来ました。佐吉さんは、超然として、べつにお祭の晴着を着るわけでなし、ふだん着のまま、店の用事をして居ましたが、やがて、来る若者、来る若者、すべて派手な大浪模様のお揃いの浴衣ゆかたを着て、腰に団扇うちわを差し、やはり揃いの手拭いを首に巻きつけ、やあ、おめでとうございます、やあ、こんにちはおめでとうございますと、晴々した笑顔で、私と佐吉

さんとに挨拶しました。其の日は私も、朝から何となく落ちつかず、さればといつて、あの若者達と一緒に山車を引張り廻して遊ぶことも出来ず、仕事をちよつと仕掛けては、また立ち上り、二階の部屋をただうろうろ歩き廻つて居ました。窓に倚りよかかり、庭を見下せば、無花果いちじくの樹蔭で、何事も無さそうに妹さんが佐吉さんのズボンやら、私のシャツやらを洗濯して居ました。

「さいちゃん。お祭を見に行つたらいい。」

と私が大声で話しかけると、さいちゃんは振り向いて笑い、

「私は男はきらいじゃ。」とやはり大声で答えて、それから、またじゃぶじゃぶ洗濯をつづけ、

「酒好きの人は、酒屋の前を通ると、ぞつとするほど、いやな気

がするもんでしょう？ あれと同じじゃ。」と普通の声で言つて、笑つて居るらしく、少しいかっている肩がひくひく動いて居ました。妹さんは、たった二十歳でも、二十二歳の佐吉さんより、また二十四歳の私よりも大人びて、いつも、態度が清潔にはきはきして、まるで私達の監督者のようでありました。佐吉さんも亦、また其の日はいらいらして居る様子で、町の若者達と共に遊びたくても、派手な大浪の浴衣などを着るのは、断然自尊心が許さず、逆に、ことさらにお祭に反撥して、ああ、つまらぬ。今日はお店は休みだ、もう誰にも酒は売つてやらない、とひとりひがで僻んで、自転車に乗り、何処どこかへ行つてしまいました。やがて佐吉さんから私に電話がかかつて来て、れいの所へ来いということだったので、

私はほつと救われた気持ちで新しい浴衣に着更え、家を飛んで出ました。れいの所とは、お酒のお燗を五十年間やって居るのが御自慢の老爺の飲み屋でありました。そこへ行ったら佐吉さんと、もう一人江島という青年が、にこりともせず大不機嫌で酒を飲んで居ました。江島さんとはその前にも二三度遊んだことがありましたが、佐吉さんと同じで、お金持の家に育ち、それが不平で、何もせずに、ただ世を怒ってばかりいる青年でありました。佐吉さんに負けない位、美しい顔をして居ました。やはり今日のお祭の騒ぎに、一人で僻んで反抗し、わざと汚いふだん着のまままで、その薄暗い飲み屋で、酒をまずそうに飲んで居るのでありました。それに私も加わり、<sup>しばら</sup>暫く、黙って酒を飲んで居ると、表はぞろぞ

ろ人の行列の足音、花火が上り、物売りの声、たまりかねたか江島さんは立ち上り、行こう、狩野川へ行こうよ、と言いつ出し、私達の返事も待たずに店から出てしまいました。三人が、町の裏通りばかりをわざと選んで歩いて、ちえっ！ 何だいあれあ、と口々にお祭を意味なく軽蔑しながら、三島の町から逃れ出て沼津をさしてどんどん歩き、日の暮れる頃、狩野川のほとり、江島さんの別荘に到着することが出来ました。裏口から入って行くと、客間に一人おじいさんが、シャツ一枚で寝ころんで居ました。江島さんは大声で、

「なあんだ、何時<sup>いつ</sup>来たんだい。ゆうべまた徹夜でばくちだな？

帰れ、帰れ。お客さんを連れて来たんだ。」

老人は起き上り、私達にそつと愛想笑いを浮べ、佐吉さんはその老人に、おそろしく丁寧なお辞儀をしました。江島さんは平気で、

「早く着物を着た方がいい。風邪を引くぜ。ああ、帰りしなに電話をかけてビイルとそれから何か料理を此所へすぐに届けさせてくれよ。お祭が面白くないから、此所で死ぬほど飲むんだ。」

「へえ。」と 剽<sup>ひょうきん</sup> 軽に返事して、老人はそそくさ着物を着込んで、消えるように居なくなつてしまいました。佐吉さんは急に大声出して笑い、

「江島のお父さんですよ。江島を可愛くつて仕様が無いんですよ。へえ、と言いましたね。」

やがてビールが届き、様々の料理も来て、私達は何だか意味のわからない歌を合唱したように覚えて居ます。夕靄ゆうもやにつつまれた、眼前の狩野川は満々と水を湛え、岸の青葉を嘗なめてゆるゆると流れて居ました。おそろしい程深い蒼い川で、ライン川とはこんなのではないかしら、と私は頗すこぶる唐突ながら、そう思いました。ビールが無くなってしまうので、私達は又、三島の町へ引返して来ました。随分遠い道のりだったので、私は歩きながら、何度も何度も、こくりと居眠りしました。あわててしづい眼を開くと、螢ひたいがすいと額を横ぎります。佐吉さんの家へ辿り着いたら、佐吉さんの家には沼津の実家のお母さんがやって来て居ました。私は御免蒙まがって二階へ上り、蚊帳かやを三角に釣かって寝てしまいました。

言い争うような声が聞えたので眼を覚まし、窓の方を見ると、佐吉さんは長い梯子はしごを屋根に立てかけ、その梯子の下でお母さんと美しい言い争いをして居たのであります。今夜、揚あげ花火はなびの結びとして、二尺玉が上るということになって居て、町の若者達もその直径二尺の揚花火の玉については、よほど前から興奮して話し合っていたのです。その二尺玉の花火がもう上る時刻なので、それをどうしてもお母さんに見せると言つてきかないのです。佐吉さんも相当酔つて居りました。

「見せるつたら、見ねえのか。屋根へ上ればよく見えるんだ。おれが負おぶつてやるつていうのに、さ、負おぶさりなよ、ぐずぐずして居ないで負おぶさりなよ。」

お母さんはためらって居る様子でした。妹さんも傍にほの白く立って居て、くすくす笑って居る様子でした。お母さんは誰も居ぬのにそつとあたりを見廻し、意を決して佐吉さんに負さりました。

「ううむ、どっこいしょ。」なかなか重い様子でした。お母さんは七十近いけれど、目方は十五、六貫もそれ以上もあるような随分肥ったお方です。

「大丈夫だ、大丈夫。」と言いながら、そろそろ梯子を上り始めて、私はその親子の姿を見て、ああ、あれだから、お母さんも佐吉さんを可愛くてたまらないのだ。佐吉さんがどんな我儘なふしだらをしても、お母さんは兄さんと喧嘩してまでも、末弟の佐吉

さんを庇<sup>かば</sup>うわけだ。私は花火の二尺玉よりもいいものを見たような気がして、満足して眠ってしまいました。三島には、その他にも数々の忘れ難い思い出があるのですけれども、それは又、あらためて申しませう。そのとき三島で書いた「ロマネスク」という小説が、二三の人にほめられて、私は自信の無いままに今まで何やら下手<sup>へた</sup>な小説を書き続けなければならぬ運命に立ち至りました。三島は、私にとって忘れてならない土地でした。私のそれから八年間の創作は全部、三島の思想から教えられたものであると言つても過言でない程、三島は私に重大でありました。

八年後、いまは姉にお金をねだることも出来ず、故郷との音信も不通となり、貧しい痩せた一人の作家でしかない私は、先日、

やつと少しまとまった金が出来て、家内と、家内の母と、妹を連れて伊豆の方へ一泊旅行に出かけました。清水で降りて、三保へ行き、それから修善寺へまわり、そこで一泊して、それから帰りみち、とうとう三島に降りてしまいました。いい所なんだ、とてもいい所だよ。そう言つて皆を三島に下車させて、私は無理にはしやいで三島の町をあちこち案内して歩き、昔の三島の思い出を面白おかしく、努めて語つて聞かせたのですが、私自身だんだんしよげて、しまいには、ものも言いたくなくなる程けわしい憂鬱に落ち込んでしまいました。今見る三島は荒涼として、全く他人の町でした。此処ここにはもう、佐吉さんも居ない。妹さんも居ない。江島さんも居ないだろう。佐吉さんの店に毎日集つて居た若者達

も、今は分別くさい顔になり、女房を怒鳴ったりなどして居るのだらう。どこを歩いても昔の香が無い。三島が色褪いろあせたのではなくして、私の胸が老い干乾ひからびてしまったせいかもしれない。八年間、その間には、往年の呑気な帝国大学生の身の上にも、困苦窮乏の月日ばかりが続きました。八年間、その間に私は、二十も年をとりました。やがて雨さえ降つて来て、家内も、母も、妹も、いい町です、落ち附いたいい町です、と口ではほめていながら、やはり当惑そうな顔色は蔽おほうべくもなく、私は、たまりかねて昔馴染みの飲み屋に皆を案内しました。あまり汚い家なので、門口で女達はためらつて居ましたが、私は思わず大声になり、「店は汚くても、酒はいいのだ。五十年間、お酒の爛ばかりして

いるじいさんが居るのだ。三島で由緒のある店ですよ。」と言ひ、  
むりやり入らせて、見るともう、あの赤シャツを着たおじいさん  
は居ないのです。つまらない女中さんが出て来て注文を聞きまし  
た。店の食卓も、腰掛も、昔のままだったけれど、店の隅に電気  
蓄音機があつたり、壁には映画女優の、下品な大きい似顔絵が貼  
られてあつたり、下等に荒んだ感じすきが濃いのであります。せめて  
様々の料理を取寄せ、食卓を賑かにして、このどうにもならぬ陰  
鬱の気配を取払い度く思ひ、

「うなぎと、それから海老えびのおにがら焼と茶碗蒸し、四つずつ、  
此所で出来なければ、外へ電話を掛けてとつて下さい。それから、  
お酒。」

母はわきで聞いてはらはらして、「いらないよ、そんなに沢山。無駄なことは、およしなさい。」と私のやり切れなかつた心も知らず、まじめに言うので、私はいよいよやりきれなく、この世で一ばんしよげてしまいました。

# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年12月20日公開

2005年10月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 老ハイデルベルヒ

太宰治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>